



一步

社会福祉法人 アルカディア
令和5年 6月 発行57号



「支援についての考え方・受け入れるために必要な事」

(社福) アルカディアのグループホーム事業所、地域活動支援センターI型ふらっと合同での研修を令和5年5月に実施しました。

医療観察制度の研修となりましたが、法制度の説明だけでなく社会復帰調整官小合氏の体験談を交えながら、支援全般における利用者との関わり方や考え方、大切にしている事柄を学ぶ機会となりました。

研修参加者のみで終わらせるのではなく、今までになかった考え方を受け止めることや、改めて支援について振り返るきっかけとして、ニュースレターで発信させていただきます。

～医療観察制度についての研修を終えて～

地域活動支援センターI型ふらっと 藤田

先ず、この医療観察法について制度の知見や対象者への関わりが無い自分にとって今回の講話は非常に勉強となりました。貴重な機会をいただけたこと前橋保護観察所並び、小合氏に御礼を申し上げます。

研修は処遇対象者とのエピソードにおいて医療観察法に触れながらも、基本的には制度よりも小合氏が仕事上大切にしている取り組みについて、お話をお伺いする形であった。

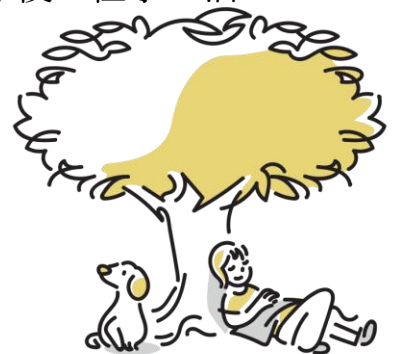
印象的であったのは、薬物中毒で触法行為を行った人について小合氏の「薬物中毒により触法行為にいたったわけであるが、薬物が無かったらその人はどうなっていただろう。どうにもならず薬物に手をだしていたなら…」という言葉であった。薬物中毒になるまでの経緯や、それ以前のその人の生き方に思いを馳せているご様子だと感じた。(医療観察に限らず)支援対象者とかかわる際、起きた出来事は勿論そこにいたるまでの経緯、その人と言う人間がどの様に培われてきたのか、にも関心を持ちそれを踏まえた関わり方も行えるようになりたいと感じた(個人情報なので、あくまで知ることの出来る範囲で、かつ色眼鏡を掛けないように。バランスが難しい印象ではある)。

また、質疑応答では「会話と対話」についても印象的であった。自分が認識している癖があるのだが、相手が話しきる前に予測して答えてしまうことがある(早すぎる相槌等)。自分がそういうモードになっている時は頭の中が目まぐるしく要は慌てており、相手の話を聞くというよりは、自分の気持ちでいっぱいになっていることが多い。厳しく言うと、人の話を聞いていない状態であるし、会話を遮られたら相手は最後まで話す気持ちも萎えてしまうと思う。落ち着いて最後まで聞いてから返そうと思っているが、緊張するとその誓いも抜けてしまう。そんな中で小合氏から聞いた「対話」とは、「(相手の言葉を)待つ仕事」「相手の言葉をどうやって出すか」の取り組みであるという事が印象的であった。この様に気を付けることで、ただ話を聞くよりも、もう一步踏み込んで聞くことに意識を持てるような印象であった。研修以来、自分もそのように意識して取り組んでいる最中である。

質疑応答では自分も質問をさせていただいた。制度については、学生時代や精神保健福祉士の受験勉強時に学んだ程度であったが、その際自分が持った疑問は「償う機会があるかどうか」であった。制度上、「治療・社会復帰・定着」が目的でありそもそも償いは別次元の話だという理解である。ただ、事件に限らず何か良くないことを起こしてしまった際、どこかのタイミングでなにかしらの償いの機会(謝罪や弁済、このような仰々しい表現でなくともふと、思いを馳せるだけでも)があることで贖罪の心が前向きになれるものだと自分は考えている。自分に処罰感情があるわけではないが、一方で向き合わなければ治療や社会復帰も難しいのでは?という疑問があった。

「起こしてしまったことと、患者はどうやって向き合うのか」という質問をさせて頂いたのだが、「本人が安心できるようになってから、初めて(起こしたことに)向き合うようになってゆく」と小合氏より教えていただいた。まずは患者本人が安心できる様に地道な関りから始まってゆくのだという。治療や社会復帰の中で、(タイミングや内容は人それぞれだと思うが)当然に起こしたことに向き合っていくことが組み込まれているのだと知った。

今後、工作上実際に処遇対象者との関りがあると思うが、自分がどの様に関われるか、相手があることなのであまり想像がつかないが、ここで得た貴重な知見・思考を自分の動き・考えに取り入れ今後の仕事に活かしていきたいと考えている。



医療観察法研修を終えて感じたこと (グループホーム職員) ①



- ・講師の方は、仲間づくりをしていると仰っていた。障がいがあるなくても、仲間づくりをしているかどうか非常に大切なのだと感じた。自分が過ごしやすい場所、過ごせる場所にしていくなため、適応していくために、自分自身がどんな工夫をしたかどうか。仲間づくりをするためにはかなりのエネルギーが必要ではあるが、きっとその頑張りには自分自身の財産になるのだと思う。障がいがあっても仲間をつくる事が出来ると思った。
- ・医療観察法の大きな特徴として、チームアプローチがあるとわかった。私は支援をするときに、指示でなく提案といった形式をとることが殆どではあるが、よりよい提案をしていくために必要なのが「私の中の提案できる選択肢」なのだと思う。しかし、利用者一人ひとりで生活歴が違い、自分なんかよりもずっと人生の先輩の方が多い。チームアプローチを意識することで、別の支援者の方にアドバイスをもらって、自分が提案できる選択肢を少しでも増やしていきたいと思った。
- ・「待つ難しさ」について考えるきっかけになった。仕事以外の場でも、どうしても次へ次へとせっかちに考えてしまう。そういった癖が、自分を追い詰めてしまったり、周りの人へも影響してしまっているかもしれない。
- ・目の前の利用者の本音を大切にするためにはどうしたらいいのか、働いて年月が過ぎていくにつれて、「〇〇さんはこう考えるだろうな」「この場合は〇〇だ」など、推測が出来てしまうようになった。推測で判断することが良いことと思ってしまうことに気づくことが出来た。推測は飽くまで支援者である自分一人の価値観に過ぎず、その価値観の中に目の前の利用者が居るのではないかと見つめ直した際に、居ないこともないが隅の方になってしまっている。これではダメで、いかに利用者中心に考えることが出来るかどうか。まずは癖である推測をしてしまったことに気を付けるようにしていかないといけない。どんどん同僚に決めつけ支援になってしまっていないか、意見を聞くようにしていこうと思う。
- ・日常生活上、様々な出来事が何かしら起きる。一度聞いただけでは信じられず、二度目でやっと受け入れられるようなことも。それが悪いことばかりではないが。そういった出来事にどこまで関わったらいいのか、疑問は付きまとう。ただ、一緒に喜んだり、楽しんだりしていくことは絶対に忘れないようにしていきたい。
- ・過去の経験から、どんな方でも受け入れをしていきたいが、やはり偏見や固定観念が拭いきれないのは事実。フィルターにかけて見てしまっていることを振り返ることが出来た。そのフィルターが悪いものとは考えないで、自分自身の素直な反応として否定せずにいたい。フィルターがあること自体ではなく、そのフィルターの存在に気付いた後に、どう接していくか。この感覚を大切にしていきたい。
- ・「対話」と「会話」の違いについて考えることが出来た。支援者のペースで会話の流れを作ってしまうていた。利用者の本音を聴くためには、支援者ペースでなく、利用者へ委ねて待つことに力を注いでいきたい。そして、そのための繰り返しのコミュニケーションにも力を注いでいきたい。

医療観察法研修を終えて感じたこと (グループホーム職員) ②

- ・日々の業務で、どうしてもルーティン化してしまっている部分があり、その中で利用者支援においての時間の割合が少なくなってしまう。自分自身の業務に向かう姿勢や時間の使い方など、改めて整理してみたいと思えた。
- ・過去に法に触れてしまった経験のある方が、その過去を背負いながら地域で暮らしていくことは簡単なことではない。本人の頑張りと、周囲の支援者の頑張りが必要。だがそれ以上に、一緒に暮らしていこうと思えるような地域なのかどうか。これが気になってしまった。「隣の家に引っ越してくる方が…」などと考えると、怖いと思う事、疑ってしまう気持ちは残念ながらあるが、過去のその方ではなく「今のその方」を見ていけるようになればよいと感じた。
- ・支援者が一人で頑張るのではなく、支援者同士で協力し合って、互いの大変さを分かち合いながら、支援者側も余力を残しながら、ゆとりを持って利用者に接していけるようにしていきたい。大変な様子は利用者にもきっと伝わってしまうから。
- ・世話人の立場として、なるべく時間を掛けて利用者の気持ちに寄り添っていけるようにしていきたい。気持ちを言葉にするのが苦手な方もいらっしゃる。そういった方へは美味しい食事作りをして、少しでも幸せな気持ちになれる時間を作れるようにしていきたい。
- ・講師の方が、自己のプライベートな部分を敢えてさらけ出して、お話をしてくださった。敢えて自己開示をすることで、話し手と聞き手とで、繋がりのようなものが出来たと感じた。そのつながりが有ると無いのでは、その後の話しの重さや濃さが全く異なってくる感じた。普段聴くばかりの仕事になってしまっていると感じるため、敢えて自分自身のことを話してみようと思った。



【編集後記】

どんな方でも安心して暮らせるような地域であることが理想かもしれない。

事情の無い方は居ないが、大きい小さいの差はあることも事実。

肯定、否定、受容、拒否、無関心など、人によって感じ方が様々ではありますが、時には良い意味での妥協をすることで、肩の力が少し抜けることもあるのではないのでしょうか？理想論ではありますが、本号編集中心こう感じたのも事実です。

編集委員会

定期連載

利用者インタビュー

・事業所を利用してよかったこと：【GH】

Aさん：話し相手がいる。世話人さんだけでなく、他の入居者の方も優しい。一人暮らしだったらきっと寂かった。誰かが居ることが嬉しい。

Bさん：他の人と一緒に暮らして『自分がしっかりしなきゃ』と思えたこと。自分が変わった。

Cさん：社会参加のためにGHに居ようと思えたこと。具体的には伝えられないけど、入居して良かった。

Dさん：社会から取り残されないでいられることですかね。色々あるけど孤独じゃないんです。それが全てです。

法人本部：群馬県太田市鶴生田町733-123

TEL：0276 (20) 2509 FAX：0276 (20) 2510

ホームページ：http://arcadia-gr.com/